岡豪風土

〈高知県立歴史民俗資料館だより〉 第20号 1996年7月1日

新発見考古速報展'96によせて

高知県文化財保護審議会会長　岡本　健児

最近の考古学の発掘調査は多くの国・公費や受益者負担の原則から開発する企業等の負担によって行う場合が多い。このような発掘は大学などが行う学術調査と異なり、多くは都道府県や市の埋蔵文化財センターが行い、行政発掘という。そして、特に後者の発掘調査の結果は多くの人びとに開示し、その学問的評価をも発表する必要がある。今日、考古遺跡の発掘終了後に一般の人びとに対して行われる現地説明会はこれである。このような発掘は全国的にみると、年間約一万件にのぼり、国民がその成果を実際にふれる機会は全くない。それがため、最近特に注目された出土品を中心に全国を巡回する展示が昨年度より始まった。そして、今年度はこの展示「新発見考古速報展'96」が県立歴史民俗資料館で展示される。展示は各県を巡回することは困難なるが故に、各地方の一都市を巡回する。東京→宮城→群馬→高知→広島→大分→滋賀→山梨の順である。なお、展示は多量の遺物群であるので、歴民館の三階常設展示室は一時撤去しての展示であり、従来の企画展示室は、この全国展と並行しての地域展である「土佐を掘る'94・'95」をも展示する。いわば、今回は歴民館全部が考古学一色の大展示会場となる。

機会があって、この展示の内容の一部を知り得たが、北九州市辻田遺跡出土の西日本最古の旧石器から始まり、最も新しいところでは、これも北九州市宗玄寺跡の小笠原家墓地出土の江戸時代武家の入歯である。この入歯は滑石製と木製であるという。また興味深い遺物として金沢市北塚遺跡出土の石製の縄文人の指輪である。縄文人は指輪に対する興味がなかったらしく、その類例は少ない。宮城県二月田貝塚の骨製指輪は数少ないものの一つである。次に北海道[illegible]部町内の二遺跡検出の縄文後期のアスファルト工房跡出土のアスファルトは土器の中に七〇〇CCも残って検出された。土器で溶解したのであろうか。縄文時代には石器や骨角器を柄に着装する時に接着剤としてアスファルトを使用する。岡山市南方遺跡からは弥生時代の匙、黒漆塗りのジョッキ(清三会)そしてシカの絵入りの木製品があり、さらに特質すべきはイノシシの下顎骨十二個を並べた儀礼用の出土品がある。如何なる儀礼に使われたのか、展示をみてその謎に迫りたい。堺市下田遺跡からは高さ二二センチの弥生中期の銅鐸が出土し、しかもこの銅鐸は製造当時のままの状態で出土し、少しも錆びない弥生時代の色調を、そのまま残したものである。

今回の展示では歴史考古学の優品が多い。考古学も歴史考古学花盛りの時代となった。日本最古の人工池大阪狭山市の狭山池より発見された東大寺復興の僧重源の石碑、京都府・滋賀県下の二遺跡より和銅開珎よりも古い日本最古の無文銀銭、そして平城京跡・藤原京跡出土の和銅開珎も出品される。長崎県鷹島海底遺跡出土の元寇船のイカリ石、群馬県藤岡市の上栗須寺前遺跡出土の一四世紀代の密教法具一式、広島県豊平町の吉川元春館跡出土の戦国武将の生活を示す道具類、さらに注目すべきものは堺環濠都市遺跡出土の一括遺物である。それは堺出土の中国・タイ・ベトナム等アジア各国産の陶磁器多数であり、併せて堺での当時の偽金造りの中国銭の鋳型があって実に面白い。今回の展示で四国の発掘品として展示を飾るのは、善通寺市香色山山頂の経塚出土の遺物類一括品である。完全な銅製経筒と、それを守る外容器等見ごたえのある考古遺物である。

企画展　土佐を掘る'94・'95

（共催　高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター）

平成8年8月2日(金)～9月8日(日)

岡本　桂典

全国で毎年約1万件ちかくの発掘調査が実施されている。高知県でも高知空港拡張に伴う田村遺跡群の発掘調査以後、近年年間30～40件と発掘調査は確実に増えている。この数は、開発が増加していることを示しているとともに、各地域の様相が様変わりしていることを端的に示しているともいえる。今回の企画展では、高知県内で一九九四・九五年度に発掘されたものを中心として、旧石器時代～近世までの注目された遺跡と出土品を高知県教育委員会・㈶高知県文化財団埋蔵文化財センターとの共催で速報的に展示する。

今回の企画展で展示する遺跡や出土品の一部を紹介したい。

旧石器時代は、約50万～1万2千年前をいう。高知県でも旧石器時代の遺跡が少しずつ確認され始めた。宿毛市池ノ上遺跡では、ナイフ形石器が出土している。このナイフ形石器は、横長の石材の剥片を用いたもので国府型ナイフ形石器に類するもので、県内では初めての発見である。旧石器時代の遺跡は西部に多くみられたが、県中央部でもその広がりが確認されるようになってきている。旧石器時代の土佐の様相は今まさに新しく書き換えられようとしている。また池ノ上遺跡では、縄文時代早期の土器や石器も出土している。

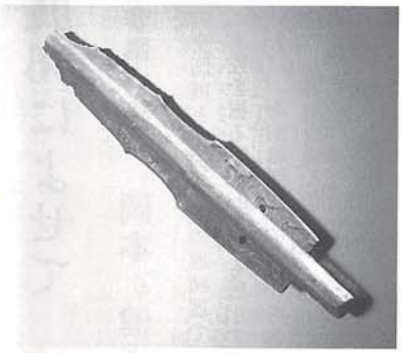
ナイフ形石器（池ノ上遺跡）

縄文土器（松ノ木遺跡）

縄文時代の遺跡では、本山町松ノ木遺跡が新聞紙上を賑わした。松ノ木遺跡では、土器捨て場から大量の縄文時代後期の土器やサヌカイト製の石鏃、玦状耳飾りなどが出土し、中には完形の土器もみられ西日本の縄文文化を研究していくのに極めて重要な遺跡として位置づけられている。また、中村市の船戸遺跡では縄文時代後期の線刻を施した土器片が出土している。本資料は本県では貴重な資料である。

線刻を施した縄文土器片（船戸遺跡）

弥生時代の遺跡としては、南国市小籠遺跡と奥谷南遺跡などがある。奥谷南遺跡では高地性集落跡が確認されている。同長畝古墳群では、弥生時代終末の土坑墓群が調査されている。野市町兎田八幡宮所蔵銅剣は、昨年の「新発見考古速報展」に展示され巡回した。

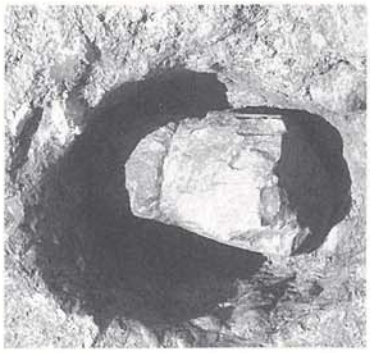


絵画銅剣（兎田八幡宮所蔵）

古墳時代では、先の長畝古墳群から多くの土器や鉄器、装飾品が出土している。伏原大塚古墳からは、県下初の埴輪が出土し、県指定有形文化財に七点が指定されている。中世以降の発掘調査も県下では極めて多くなっている。葉山村姫野々城跡の調査では輸入陶磁器類が出土している。土佐国分寺跡からは、常滑焼甕とともに国産の海獣葡萄鏡片が出土している。船戸遺跡からは、極めて全国的にも珍しい石製の錨が出土している。

埴輪（伏原大塚古墳）

海獣葡萄鏡片（土佐国分寺跡）



錨出土状況（船戸遺跡）

中世末から近世遺跡では、高知城跡の発掘調査がある。調査では高知城跡築城以前の遺構が確認された。また、南国市の奥谷南遺跡や小籠遺跡では近世の墓の調査がされ、奥谷南遺跡では儒墓に伴う甕棺が出土している。小籠遺跡では、近世の土坑や井戸跡にメスを入れ興味深い遺構が確認された。

甕棺と蓋の鉢（奥谷南遺跡）

最後に、現在まで新聞報道のみで博物館では県指定後ほとんど公開されていない県指定有形文化財の指定物件について述べたい。今回は、平成6年度に県指定有形文化財になった4件の資料を公開する。

◆平成六年度県指定有形文化財

懸仏の弥陀三尊と銅製狛犬（三軀・一体）

伊野町三上八幡宮所蔵の懸仏の三尊像と狛犬一体で、室町時代前期のものと考えられる。懸仏は、円形の銅板などに神仏の像をつけて、その上部に環を付けて、懸けて礼拝の対象としたものである。阿弥陀三尊像には、銅板にはめ込むための小鋲がある。狛犬は、丸彫りされたもので、顔を上げ口を開ける阿形をなしている。これらの三尊像は、三上八幡宮の本地仏で中央に阿弥陀如来、右に観音菩薩、左に勢至菩薩を配する弥陀三尊でこれに狛犬が付属するもので狛犬が残る例としては非常に珍しいものである。

地蔵板碑　（一基）

香我美町山川阿弥陀堂（中山川地区所蔵）にあった板碑で、鎌倉～室町時代初頭のものと推定される板碑である。

板碑とは、中世の供養塔或いは逆修塔として造立された石造塔婆の一つをいう。この地蔵板碑は、高さ一八二センチ、最大幅が四三・七センチ、厚さが五～五・五センチである。板碑の上部には種子（バン〈大日如来〉）を薬研彫し、その下に地蔵菩薩立像が彫られている。その両脇には脇侍が刻され、地蔵の右には司禄が、左には司命が刻されている。全国でも極めて類例の少ない地蔵板碑である。

地蔵板碑

懸仏の弥陀三尊と銅製狛犬

三上八幡宮の鉄釣燈籠　（一点）

吾川郡伊野町三上八幡宮所蔵の釣燈籠は、高さ二一センチの鉄製の釣燈籠である。

釣燈籠は、燈籠の笠の上に釣環をつけ、仏前や社寺などの軒先に懸けるものである。この燈籠の笠は二段になり、上の笠の柱は六角形の鉄板で支えられている。この鉄釣燈籠の扉には、寛正六（一四六五）年銘の紀年銘と銘文が刻されている。慶長年間以前の釣燈籠は、全国でも少なく本鉄釣燈籠は高知県内で確認されているものでは最古の鉄釣燈籠である。

伏原大塚古墳出土埴輪（七点）〈前掲〉

三上八幡宮の鉄釣燈籠

次回は特別巡回展「新発見考古速報展'96―発掘された日本列島―」〈開催期間：平成8年9月15日（日）～10月6日（日）〉を催します。巡回展は、歴史民俗資料館では初めての試みで、3階常設展示室を展示変えし、3階と1階企画展示室を会場として開催する。なお、企画展「土佐を掘る'94・'95」は特別巡回展の時は、資料を追加して「地域展―土佐を掘る'94・'95」として3階常設展示室の一部と1階企画展示室で行う。

＝全国特別巡回展＝

「新発見考古速報展'96」発掘調査の最新成果

開催期間　平成8年9月15日(日)～10月6日(日)

文化庁文化財保護部記念物課文化財調査官　西田　健彦

毎年、全国で約一万件の発掘調査が実施されている。宅地開発や道路建設など大規模な開発工事を契機として行われる調査が多いことが、近年の特徴である。調査面積は広大になり、台地の上も、低湿地もあらゆる区域が調査の対象となっている。その結果、家、墓、道路、水場、田畑などムラ全体の姿がわかる遺跡が増えてきた。

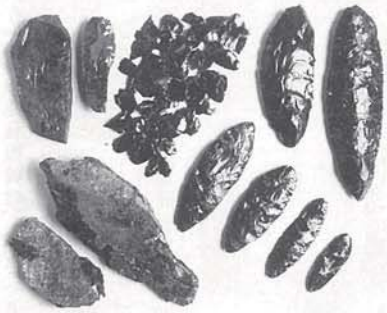
また、遺跡から見つかった木材の年輪によって遺跡の年代を一年単位で判定する方法が確立されたり、花粉分析から植生の変遷をたどり自然環境を復原したり、トイレ跡に残っていた寄生虫卵などの微細な情報を詳細に分析することにより、当時の人々の食生活や健康状態までも考察できるようになるなど、様々な観点からの歴史解明も活発である。

そのため、今日の発掘調査は以前とは比べようもないほど多くの情報を提供するようになった。日本の歴史がこれまで考えられていた以上に古くから始まっており、大昔の人々の暮らしぶりも想像以上に豊かだったことがわかり始めてきている。

最新の発掘調査の成果をより多くの方に見ていただくことを目的として、文化庁と各開催館が主催し、全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会、全国埋蔵文化財法人連絡協議会の共催で実施する「新発見考古速報展」も二年目を迎える。

今年、全国を巡回する展示品は、北海道から沖縄県までの四〇遺跡から出土した四〇〇点余りで、どれも最近注目を集めたものばかりである。昨年とは内容を一新し、新たな成果を皆様方に見ていただくこととしている。

大雪山連峰の東北の山麓にある白滝遺跡（北海道白滝村）は、今から約一万二千年前、考古学では後期旧石器時代といわれる時代の石器製作場跡である。石器の原料となる黒曜石の原石や黒曜石製の各種石器を展示するが、中でも注目すべきは槍先として使用された尖頭器である。最大のものは長さ三六・五センチ、重さ一・二キロもある。遺跡がある白滝村は、黒曜石の原産地としても有名で、ここで産出した黒曜石は北海道内はもとより、津軽海峡を越えて本州、さらにはサハリン、沿海地方まで運ばれていたこともわかっている。それほど白滝の黒曜石は名の知られた石材だったのだろう。

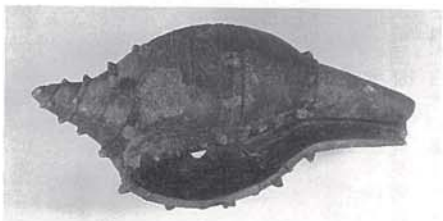


黒曜石の原石・尖頭器（北海道白滝遺跡）

紀元前三〇〇年頃までおよそ一万一千年間続いた縄文時代は、豊かな自然の恵みのもとで、人々は生活を営み、文化を育んでいた。近内中村遺跡（岩手県宮古市）は縄文時代の後期から晩期にかけての時期の住居跡、配石遺構、墓、貝塚からなる集落跡である。今からおよそ三千五百年前、縄文時代後期の墓穴の上からは深鉢や壺、注口土器などの土器が一〇個まとまって発見されている。これらの土器に供物を入れ、葬送の儀礼が行われたと考えられる。また、同時期の竪穴から出土した長さ二三・五センチの巻貝形土器は、この種の土器としては全国で三番目の発見であり、極めて珍しい。巻貝の特徴を写実的に表現したもので、縄文文化の芸術性の高さをあらためて実感させる。

弥生時代になると、稲作と金属器の使用が始まり、中国の歴史書に書かれているような小国家が形成され始めるようになる。

池子遺跡群（神奈川県逗子市）では、かつて川であった区域を発掘調査したところ、木製の鍬や鋤などの農具、布巻具などの機織り具、シカの角で作られた釣り針や銛先などの漁労具をはじめとする多種多様な道具類が発見された。木製の柄に装着されたままの状態で見つかった石斧もある。このように、低湿地の部分の発掘調査を行うと、通常では腐ってしまう木製品や動物の骨・角・牙で作られた品々が今日まで良好な状態で保存されてい



巻貝形土器（岩手県近内中村遺跡）

ることが多い。耕作や漁労の方法が復元できるばかりでなく、当時の道具を用いた場合の作業効率に関しても貴重な情報を提供してくれる。

池上曽根遺跡（大阪府和泉市、泉大津市）は近畿地方屈指の大規模な環濠集落跡である。集落の中央部から長さ二〇メートルに及ぶ大型の高床式の建物や、クスノキの巨木をくりぬいて作られた内法の直径が二メートルにも達する井戸枠が据え付けられた大井戸が発見された。神殿と井戸の南には石器や土器、飯蛸壺を埋納した痕跡が点在し、集落内部における特殊な空間を形成していたことも判明している。このように大規模で、大型の建物が建ち、祭祀などを執り行う空間を備え持つ集落が、弥生時代の国の中心となっていたと考えられる。残念ながら、建物や井戸の実物を展示することができない。パネル写真でご勘弁願いたい。

行者塚古墳（兵庫県加古川市）の出土品の中では、粘土製の供物が目をひく。古墳は五世紀前半に築かれた全長約一〇〇メートルの前方後円墳で、前方部と後円部にそれぞれ二つの造出部を設置している。前方部西側の造出部には、方形に立て並べられた円筒埴輪列の中央部には家形埴輪が据えられ、その手前に土師器高坏や籠目をつけた土器が置かれていた。粘土製の供物はこの土器とともに見つかった。アケビ、菱の実、魚、鳥、まんじゅうをかたどったこれら供物は、土器に盛られて墓に供えられていたと考えられる。なぜ模造の供物を作ったのか。死者に対するまつりの状況を知る上で貴重であるとともに、当時の食生活を明らかにできる。

奈良県明日香村の飛鳥池工房跡は藤原京の近くにある金属器やガラス製品を作った工場の跡である。ここからは金属製品やガラス玉の鋳型をはじめ、原料を溶かして鋳型に流し込むときに使用した坩堝やとりべが見つかっている。また、木で作られた鏃や釘、刀子や鎌など金属製品の注文見本（様）も出土している。いずれも飛鳥時代の工芸技術を物語る貴重な資料である。工人達はこの見本を見ながら仕事に励み、ここで作られた様々な品物が、宮殿や寺で使用されたのであろう。

仏の教えが衰退し長い暗黒の時代とされる末法の世。日本では平安時代の終わり頃に、末法に入るとされた。経典がこの世から滅亡することを恐れて、経典を地下に埋めることがこの頃から中世にかけてさかんに行われた。経塚、いわば「お経のタイムカプセル」である。香色山一号経塚（香川県善通寺市）は、総本山善通寺の西に隣接する香色山の山頂で発見された。一つの石郭を上下二段に区分した特殊な構造を持っている。十二世紀前半の下部石郭は主郭と副郭に分かれ、主郭には瓦器外容器に納められた銅板製経筒が、副郭には刀剣類が納められていた。十二世紀末頃に追納が行われた上部石郭からは土師器外容器や短刀片とともに和鏡、鏡筒と考えられる円筒形銅器が出土している。

「自由都市堺」という言葉を歴史の授業で耳にした方も多いと思う。都市化が進んだ地域であっても地下には遺跡が残っている。堺環濠都市遺跡（大阪府堺市）からは中国・タイ・ベトナムなどアジア各国からもたらされた高級陶磁器がたくさん発見された。織田信長や豊臣秀吉の時代に活気にあふれ、繁栄した堺の様子を偲ぶことができる。

首里城跡（沖縄県那覇市）は琉球国王の宮殿の跡で、歴史公園としての整備が現在も進められている。建物や城を区画する城壁の復元のための資料を得るために行われている発掘調査で発見された屋根瓦の大半は中国系である。また、橋の欄干には龍をあしらった石製の羽目石を用いるなど、中国大陸との交流を背景とした沖縄らしい宮殿のあり方がうかがえる。

このほか、西日本で始めて確認された旧人の石器（北九州市辻田遺跡）、縄文狩人を彫刻した石（群馬県矢瀬遺跡）、現代の技術では作ることができないのではとされる厚さ3ミリメートルまで薄く削って仕上げられた黒漆塗りジョッキをはじめとする多種多量の弥生時代の木製品（岡山県南方（済生会）遺跡）、壁のない大型の家形埴輪（栃木県富士山古墳）、壺の肩に狩猟や相撲の様子を表す小群像が並ぶ装飾須恵器（兵庫県勝手野古墳群）、日本最古の貨幣である無文銀銭（滋賀県尼子西遺跡、京都府小倉町別当町遺跡）、弘安の役の時の元寇船のイカリ石や砲弾（長崎県鷹島海底遺跡）、江戸時代の武家の墓から出土した石や木で作られた入れ歯（北九州市宗玄寺跡）なども展示する。

家形埴輪（栃木県富士山古墳）

四国地方での速報展の開催は初めてである。百聞は一見に如かず。旧石器時代から江戸時代までの全国の最新発掘成果をご覧いただき、埋蔵文化財が日本の歴史、地域の歴史を理解する上で大きな役割を担っていることをご理解していただきたい。

開館5周年記念

「秀吉と桃山文化」

―大阪城天守閣名品展―のご案内

毎日新聞社主催の全国特別巡回展「秀吉と桃山文化」（大阪城天守閣名品展）の企画書を初めて見た時、その充実した内容に目をみはると同時に、「ま、ウチにはかんけーないか」との思いが胸をよぎったことを覚えています。当館の企画展示室では、美術工芸品を中心とした200点もの資料を展示することは不可能だからです。しかし、知恵と工夫により開館5周年にふさわしいこの超大型企画展が、ついに当館で開催されることになりました。

「秀吉」展では、企画展の前後に休館日（11月26日～12月1日／1月28日～2月2日）をいただき、3Fの常設展示を撤去します。そして、各種の模型やAV機器を間仕切りパネルで隠し、大きい展示空間を確保します。

ストーリーは

〈序章〉南北朝・室町の争乱

(1)南北朝・室町　武器武具の名品

(2)戦国の幕開け

〈第一部〉豊臣秀吉　天下統一への道

(1)群雄割拠

(2)織田信長の登場

(3)天下人秀吉

(4)太閤記の世界

(5)秀吉の一族

〈第二部〉太閤秀吉と桃山文化

(1)南蛮文化

(2)茶人の書と肖像

(3)蒔絵・調度品

(4)桃山時代の武器武具

(5)朝鮮出兵

〈第三部〉豊臣秀頼と大坂の陣

(1)秀吉の死

(2)関ヶ原合戦

(3)天下人二世

(4)大坂の陣

〈終章　大坂城再築〉

の三部構成（予定）で、3Fでは、南北朝・室町の武器武具から朝鮮出兵まで（現在の中～近世の部分には地域展示として長宗我部元親の資料が並びます）を展示し、2Fには黄金の茶室（実物大推定復元）を、そして、1F企画展示室には、秀次切腹から大坂城再築までを展示します。他にも、写真パネルによる豊臣秀吉史蹟巡りコーナー（1F通路壁面）や体験学習室での各種ビデオの放映（大阪城製作）なども予定しており、期間中当館は秀吉ワールドとなります。

公開・展示される資料は、大阪城天守閣の誇る収蔵品8千点の中からえりすぐった約200点（前期・後期の入れ替えあり）で、中でも門外不出の名品『大坂夏の陣図屏風』をはじめとする種々の合戦屏風絵、織田信長、武田信玄・上杉謙信・伊達政宗らの書状、「刀狩り」の朱印状や意匠を凝らした武器武具などの秀吉関係資料は圧倒的ですし、彼の時代に華開いた桃山文化（南蛮美術・蒔絵（まきえ）等）の逸品も観る人の心をとらえて離さないでしょう。

南蛮屏風（右隻）大阪城天守閣蔵

これほど大量の資料が大阪から外に出ることは過去に全く例がなく、また、今後も二度とないと思われます。

あなたも是非この機会に重厚で艶やかな展示会場の中で、素顔の「秀吉」に会ってみませんか。

なお、期間中、学校等による見学学習大歓迎です。教科書に出てくる資料の実物を見ながら歴史の授業をし、黄金の茶室の前で記念撮影というのも思い出になると思います。二度と見ることのできないこの特別展示を高知のこども達のために、それは当館の願いでもあるのです。

（野本　亮）

特別巡回展

秀吉と桃山文化

3階常設展示室・1階企画展示室で開催

平成8年12月3日(火)～平成9年1月26日(日)

●講演会　12月14日（土）　渡辺　武氏
「秀吉の虚像と実像」
平成9年1月18日（土）　秋澤　繁氏

本棚

木村　剛朗著

四国西南沿海部の先史文化

旧石器・縄文時代

（幡多埋文研刊　B5版　本文　九一九頁　写真図版　五九頁　頒価　七千円）

在野の考古学者として敬愛される木村剛朗氏が、昭和六二年に出版された『四万十川流域の縄文文化研究』に続き、平成七年一二月に『四国西南部沿海部の先史文化―旧石器　縄文時代』の大著を幡多埋文研から出版された。

木村氏の著書には、『高知県檮原の縄文遺跡と遺物―土佐考古学叢書1―』（昭和五三年）、『姫島産黒曜石の交易―土佐考古学叢書2―』（昭和五三年）、『四国西南旧石器・縄文期の新発見遺跡と遺物―土佐考古学叢書3―』（昭和五四年）、平尾道雄学術賞を授与された『四万十川流域の縄文文化研究』（昭和六二年）、高知県出版文化賞を授与された『幡多のあけぼの』（平成三年）があり、本書がなんと六冊目にあたる。この著作を見てもわかるように、木村氏の考古学への情熱と活力には、皆がいつも驚かされるのである。

人間の人生には、大きな転機というものがあるという。木村氏にとっては、中学生の時に―古の地に落ちたる土の器や石のかたりべ―との出会いが大きな転機になったという。この地の器達への氏の語りかけが、本書のような大著に結びついたのである。

本書は、四国の西南沿部における旧石器～縄文時代の先史文化を考察したもので、本書に納められた遺跡と遺物は、六三遺跡という膨大な数にのぼっている。これは木村氏の長年の踏査の調査・記録に考察を加えたものともいえる。さらに巻末には各時期における生活と文化への考察を書かれている。この氏の業績は、高知県や四国周辺地域のみならず中央の学会においても非常に注目されていることは周知のとおりである。本書を含め、氏の著作は四国の旧石器時代から縄文時代を研究するには、必ずや紐とかれる書となることは言うまでもない。また、四国のみならず日本の縄文時代の考古学史においても長く紙価を高める書となるであろう。木村氏の考古学研究という学問を支えた奥様の影の努力にも敬意を表したい書でもある。

（岡本）

土佐を掘る'94・'95の展示資料から

三上八幡宮鉄釣燈籠（平成6年県指定）

岡本　桂典

釣燈籠は、燈籠の籠の上に釣りさげ用の釣環をつけたもので、仏前や社寺などの軒先に懸ける燈籠である。吾川郡伊野町三上八幡宮所蔵の鉄釣燈籠は、高さが二一センチの鉄板を組み合わせた六角形の鉄釣燈籠である。（3頁参照）笠は二段になっており、上の笠の柱は六角形の鉄板で支えられている。笠の上の宝珠や釣環は失われている。保存状況は、湿度の高いところに保存されていたため、全体にかなり腐食が認められ、剝離が著しい。

火袋扉には銘文が刻されており、本鉄釣燈籠が寛正六年（一四六五）のものであることがわかる。銘文には次のようにある。

「大日本国土州阿河郡鹿敷村
聖八幡大菩薩　御　宝前灯篭也
右諸願　成　就皆令　満足故
大旦那惟宗朝臣親康　鍛冶大工（ママ）
寛正六年乙／酉九月吉日
／八木勘解由」

県指定前の調査時に銘文を肉眼で判読しているが、銘文の二行目の「宝前灯篭」の下には銘が判読できなかったが、X線撮影により「也」という文字が読め「宝前灯篭也」と判読された。また、三行目の「皆令満足」の下にも「故」という文字が判読できた。金石文の銘文の浅いものには、X線撮影を行うことが重要である。この燈籠は、本県では鉄製燈籠としては唯一のもので、本県最古のものでもある。

歴民スポット⑩

搬入口

博物館では、巡回展や企画展の展示資料を搬入する搬入口があります。歴民では、職員駐車場の奥に搬入口があります。ここから美術専用車などに積み込まれた資料を搬入します。大型のトラックが入れるようになっています。重量のある資料も搬入できるようにクレーンも備え付けてあります。資料は、トラックから一時保管庫に納められ燻蒸後、展示室や収蔵庫に搬入されます。

（岡本）

7～9月の催し物

〔企画展〕

8.2～9.8	土佐を掘る　'94・'95	高知県内で1994・95年に発掘された旧石器時代から近世までの考古資料を展示します。併せて県指定になった考古・工芸資料も展示します。

〔全国特別巡回展〕

9.15～10.6	新発見考古速報展'96 －発掘された日本列島－ 3階常設展示室・1階企画展示室で開催	全国で1995年に発掘され注目をあびた旧石器時代から近世の発掘成果を速報します。併せて「地域展－土佐を掘る'94・'95－」も開催します。

〔講演会〕　午後2時～4時　聴講無料　葉書にてお申し込み下さい（定員100名まで。先着順）

8.24(土)	南国市奥谷南遺跡をめぐって	松村信博先生（㈶高知県埋蔵文化財センター主任調査員）
8.31(土)	高知城跡の発掘	曽我貴行先生（㈶高知県埋蔵文化財センター調査員）
9. 7(土)	善通寺香色山経塚をめぐって	笹川龍一先生（善通寺市教育委員会文化振興課主事）
9.21(土)	「新発見考古速報展'96」 発掘調査の最新成果	西田健彦先生（文化庁文化財保護部記念物課文化財調査官）

〔子ども歴史教室〕　（当日受付。定員30名。親子可）

7.13(土)	紙芝居「ジョン万次郎」	午前10時半、午後2時（各1時間程度）

［臨時休館のお知らせ］

特別巡回展「新発見考古速報展'96」の資料の展示、搬入搬出に伴い下記の日を臨時休館と致します。

臨時休館日　平成8年9月10日～9月14日
平成8年10月8日～10月11日

〔出版物のご案内〕

●高木啓夫著『いざなぎ流御祈禱の研究』（A5版　本文五二三頁）

いざなぎ流御祈禱は、物部村に伝わる民間信仰で、国の無形民俗文化財にも指定されています。著者の高木啓夫氏は、三〇年近く「いざなぎ流」の調査研究を行われ、この本はその集大成となるものです。高知県の民間信仰の深遠に迫る力作です。（定価四五〇〇円）

●『研究紀要』第5号（B5版一三六頁）

岡本桂典「土佐における棟札の考古学的研究（1）―高岡神社の中世の棟札―」／矢木伸欣「明治十三年国会期成同盟大会とそのための国会開設願望書案について」／下村公彦「資料紹介―堀見家資料より（2）―堀見熙助と明治十三年前後の『勧業』」／野本亮編「平成七年度資料調査員調査報告―戦争体験調査報告―」（定価六〇〇円）

〈ひとこと〉

本館、初めての特別巡回展「新発見考古速報展96」を開催します。是非この機会をお見のがしなく、御来館ください。（岡本）

〈訂　正〉

前号の企画展紹介記事の中で若松葵紋蒔絵雛道具の成立期を慶長期としていましたが、五月の講演会で加藤先生より本資料は享保期以降のものと見られるとの御訂正を頂きました。お詫びして御報告申し上げます。（下村）

〔歴民館日録〕

月日	出来事
平成八年	
四月一九日	企画展「山内家の名宝Ⅱ」開幕
四月二七日	子ども歴史教室「山内家の名宝を見よう」
五月一一日	企画展講演会「山内家の漆工品」
五月一九日	企画展「山内家の名宝Ⅱ」閉幕
六月八日	子ども歴史教室「歴民たんけん」

平成八年七月一日
編集・発行　高知県立歴史民俗資料館
〒783 南国市岡豊町八幡1099－1
TEL　0888(62)2211
FAX　0888(62)2110
開館時間　午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
休館日　毎週月曜日（祝日及び振替休日にあたる場合は火曜日）12月28日～1月4日
入館料（常設展）大人（18才以上）400円
団体（20人以上）320円
高校生以下は無料
療育手帳・身体障害者〈1・2級〉手帳・障害者手帳所持者とその介護者（1名）、高知県長寿手帳所持者は無料
印刷・川北印刷株式会社